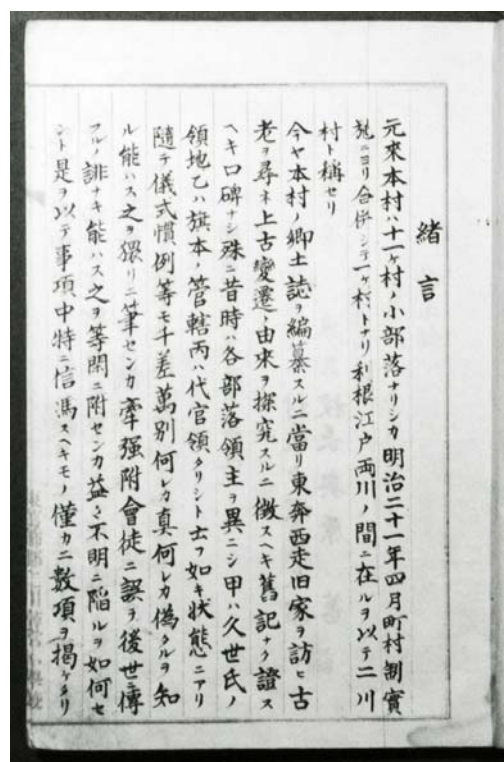


郷土教育と「郷土誌」

(きょうどきょういくと「きょうどし」)



『二川村郷土誌』（二川小学校所蔵）

最近、ニュースで「愛国心・郷土愛」育成に関する教育問題が取り上げられることがあります。実は、明治以降の教育現場でも、この問題はしばしば取り上げられてきました。

戦前、地域教育の拠点であった小学校では、この問題が浮上するたびに、地域のことをしっかり把握しようとの試みがなされました。それは、愛情というものは、人間どうしても相手をよく知らなければ芽生えない感情のように、郷土愛を育むには地域のことをよく知ることが必要だと認識されていたからです。そのために、地域の経済や産業の現状と歴史について考える地理科や国史科だけでなく、身近な自然の様子を知ろうとする理科、地域に伝わる方言や昔話、里謡などに目を向ける国語科や音楽科など、多くの科目の先生方が、地域を対象とする学習を考え、取り上げ、教えていました。

そうした教材を集大成したのが「郷土誌」でした。市内の古い小学校などには、いくつかの「郷土誌」が伝わっています。『二川村郷土誌』（明治44年・1911）、『川間村郷土誌』（明治45年頃）、『野田町誌』（大正7年・1918）、『福田村郷土誌』（昭和6年・1931）などです。

その構成をみると似たようなスタイルが多いので、何らかのマニュアルがあったのだと思いますが、実際に、いろいろな調査をし、資料を探し、人々に聞き取りをしなくては書けないものばかりです。「冠婚葬祭に於ける儀式慣例」という項目では、珍しいお祭りの紹介から、どこの家庭でも行われているような年間の行事を日を追って細かに書き込んであったりします。「農業」の項では、農具を絵に描いてサイズまでもが記されています。「戦病死者及廃兵」の項には、個人情報の問題となる昨今では考えられないことですが、村から日露戦争などに出征した若者が、どのように学び、働き、どこで戦って死んでいったかを、一人ひとり記しています。

こうした「郷土誌」を子供たちが読むことによって、身近に先祖の生き方を知り、その頑張りや喜びを感じ、自らも郷土に根ざして力強く生きていくことを学び取っていったのだと思います。そして、これらの「郷土誌」は、現在もなお、野田市の歴史を伝える資料として、市民の貴重な財産となっています。

《詳しくは…》

* 野田尋常高等小学校編 1986 復刻『野田町誌』国書刊行会

* 野田地方文化研究会 1967「川間村誌 旭村誌 関宿町誌」『野田文化』第 15 号

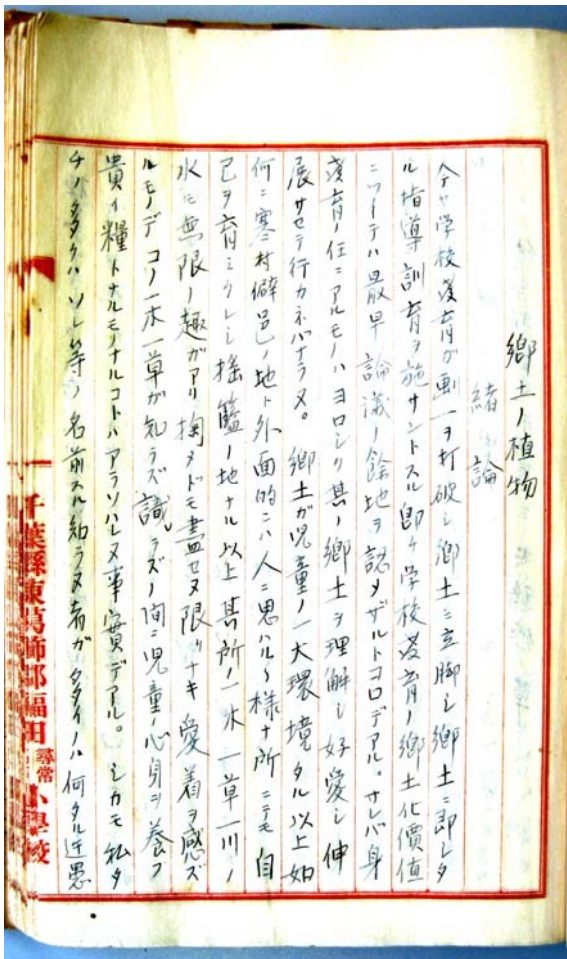


「旭村誌」の碑 (目吹 熊野神社)

明治 22 年(1889)に旭村ができたとき、元の戸長(村長のような役職)浦辺孫八の発案で建立されたものです。小学校とは直接かかわりませんが、石に刻むことで、長く地域の人々に、その土地の歴史を知ってもらいたいとの願いが込められています。



『福田尋常高等小学校児童用 郷土誌』(昭和 5 年頃)(野田 松山稔家文書) 普通「郷土誌」は文語体で書かれることが多いのですが、これは小学生用に口語体で書かれています。



「郷土の植物」(福田第一小学校所蔵)

『福田村郷土誌』の、ある 1 ページです。「自己を育みくれし揺籃の地」には「一木一草一川の水も無限の趣」とあると、当時の先生方の情熱を感じる文章がつづきます。